

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

昨年五月から一年余にわたり、中国新聞紙上で「世界のヒバクシャ」を連載した。核兵器工場、核実験、原発事故などによるヒロシマ・ナガサキ以後の核被害者を世界に追ったルポルタージュである。取材した国は、米ソ英仏の核保有国をはじめ、中部太平洋マリアナ諸島など十五カ国、二十一地域。連載回数は、最後の「提言」シリーズを含め、第二十部、計百三十四回。この間、シリーズ集大成として八ページ特集(五月二十九日付)をはじめ、英国被曝(ばく)退役軍人」に関してなど一ページやワイド(二ページ)特集も十回を数えた。

時代の病理——放射能被害が つきつける現実

田 城 明

連載を終えた今、改めて感じるのは、ヒロシマ・ナガサキ以後この四十五年間、核戦争だけはかろうじて防ぎ得たものの、放射能汚染の広がりや放射能被害者の拡散は食いとめ得なかつたというところである。世界のヒバクシャが抱く放射能に対する不安、恐怖は、時代の病理を象徴していた。体制の違いを越えた「核」をめぐる秘密主義、辺境の少数民族の犠牲とそれを強いた大國のエゴ、後世にまで続く高価なツケ

私自身は英国、フランスなどヨーロッパ五カ国とマレーシア、インドを回った後、今春、「第五福竜丸」の二十三人の乗組員を中心に日本人のビキニ被災者取材した。「福竜丸だより」の読者には既知のことかも知れないが、第五福竜丸の乗組員のうち、既に八人が亡くなっていた。交通事故死した一人を除き、肝臓がん四人などいづれも肝臓障害が死因である。四十一六十代のおもにも早い死。生存者も慢性肝炎や糖尿病などいくつもの病気を抱えている人がほとんどだった。

(中国新聞報道部記者)

第五福竜丸の絵本ビキニ の子どもたちの教材に

毎年夏休みとともに、展示館は高校生のグループ見学が目立つようになり、今年も千葉県の高校がいくつか来館、幕張、津田沼、稲毛とカメラとノートを持って宿題に余念がありません。広島へおもむく子どもたちとお母さんの見学も多く、船橋コープ生協広島子ども派遣団七十名も、

平和への流れはよどみなく

武田 隆雄

「平和運動は広がりをもつ時は一気に広まり、また、逆にしぼむ時もあり。しかし、たった一人になってもやっつけていかなければならない運動です」。

今年はお揃いの黄色いスカートを付けて説明に耳を傾けました。「原爆と水爆の原理、破壊力、その相違を簡単に」と難しく、基本的な質問も飛び出します。各地の「老人大学」「青年学級」の見学会も多く、史蹟めぐりの会、健康歩く会などのグループもつきつきに展示館を訪れました。「ビキニの海は忘れない」の映画の上映を進める東京港区の実行委員会の青年たちも上映会前に展示館を見学、「多くの人に第五福

竜丸と映画を見てもらいたい」と語りました。七月十五日、広島・長崎へ向かう自転車平和行進が展示館前で集会を開き出発。毎月、久保山記念碑前で被爆者追悼会を行なっている「群衆の渦」の青年たちで、記念碑前の早咲きのコスモスがその壮途を見送りました。マリーシャル諸島マジュロからうれしい便りも届きました。マジュロに滞在中のカメラマン島田興生さんから、マジュロのビ

キニ事務所の連絡官ニールデンザールさんがキリ島の小学生の教材に絵本「わすれないで」第五福竜丸ものがたり」を使用したいと願っているとの知らせ。七月七日、中央郵便局から航空便で、十五冊を急送しました。ビキニの子どもの目に夢の島の第五福竜丸はどのように映り、どんなたよりをくれるのでしょうか。

新たに賛助会員

最近、つぎの方々の方が協会の賛助会員になってくださいました。
河津悠子、金光教芝教会、三浦博史、溝口猛、宮治玲子、本島等、山下誠。(敬称略)

平和随想 (43)

三宅 泰雄



私が一九七一年の春ごろから、上顎がんにおかされ、医師の献身的な努力のおかげで、一命を救われたことは、すでに前にも記した通りです。

しかし、あとには種々の障害がのこり、前のような生活はできにくくなりました。しかし、医師の力で一命を救っていただいたことは、私には何にもまして有難いことでした。

退院してから、十年くらいたつたとき、入院時の病床日記と、私の医学観を一冊の書物にまとめ、現在、病気で悩んでいる人たちが、多くの医師にも読んでいただいた

ら、どうだろうか、と考えました。

私はもともと、日記をつける習慣をもっていませんでした。しかし、入院中は声も出せなくなったので、連絡のため日記を付け始めたのでした。この日記・評論集は「がん病床からの生還」と題し、一九八一年六月に新日本出版社から出版されました。

この種の書物は数少なかったため、多くの新聞雑誌で、好意的に紹介されました。

しかし私は治療のため、顔面に多量のX線をあびたので、目に故障が出はじめました。

手術後五年くらいから、視力がしだいに減退し始めました。しかし、一九七六年くらいまでは我慢して、エディンバラ市で開かれた国際会議に出席したり、死海にまで行って、死海の水のサンプルを採取してやることもできました。

その後は、目の障害が急速に進み、半盲の状態におち入ってしまいました。この状態から脱却するため、一九八二年の二月に武蔵野赤十字病院に入院し、青池明先生の手術で視力を回復することがで

きました。

武蔵野赤十字病院から退院してから、私自身が主催する会で挨拶をしたあと、急に吐き気がきました。私は、その頃、流行していた感冒だろうくらいに簡単に考えていました。

しかし、そのうちに病状が悪化したため、武蔵野赤十字病院で見ていただきました。その結果は胆のう炎ということで、再入院することとなりました。

三週間くらいで退院を許され、前々から友人が計画していたけれど、私の喜寿の祝いに出席することもできませんでした。しかし八月になって、前と同様の病が再発したため、再び病院にもどりました。その内に、胆のう炎のほかに、肝臓の一部にがんがあるらしいことが分かりました。

このことを聞いた家内と同僚の猿橋さんは、私をがんセンターに移すことを考え、赤十字病院の許可を得て、実行に移しました。私が以前にがんセンター病院にいたときから、十数年もたっていたので、そのころの医師はほとんど、

代わっていました。

猿橋さんはがんセンター研究所の田ノ岡先生をお願いし、外科部長の長谷川先生を紹介して頂きました。田ノ岡先生と長谷川先生とは以前から、親しい仲であったため、がんセンターに移ることができました。移ったのは九月初めでしたが、詳細な検査結果をまわって手術を受けたのは十月十六日でした。百十グラムの肝臓の部位を切除し、手術には、九時間半もかかりました。

私は再度のがんを克服し、生き延びることができました。二度目の手術から五年以上、無事に過ごすことができ、医学の進歩と医師の熱意に、感謝するの他はありません。



盲学校の生徒が学びやすい 第五福竜丸展示館

佐々木 夏実

私自身が第五福竜丸と出会ったのは、中学時代の社会科の学習であつた。そして、日本の多くの生徒たちが第五福竜丸と出会うのは社会科の授業であると思う。

しかし、日本全国の生徒たちが第五福竜丸に出会うかという点を決してそうではない。なぜなら、私の勤務する盲学校は国立の盲学校として日本にただ一つ存在している関係もあって、生徒を全国から募集している。この間、高校生の現代社会の授業で「平和について考える」というテーマで生徒たちと様々な角度から平和について考えている。そのとき中学校までの社会科の学習でどんなことを学んだのかという点から生徒に発表させることを行っているが、平和の問題に関わって、広島・長崎の原爆の「被害」については一定学んでいるものの、日本軍のアジアに対する加害や第五福竜丸の問題は多くの生徒の平和認識から欠落して

いる。私が生徒たちに社会をよりたしかにみていく力として育てたい平和認識としては、日本人としての被害者の側面から具体的な事実を通して何が問題となっているかを主体的に受けとめて行けること。そして、アジアの民衆への加害者としての立場から、アジアの人々と連帯して平和を考えていけるような平和認識に迫っていくこと。そして、被害、加害という構造がどのように作られていったかという平和認識が必要ではないかという気がする。そうでないと第五福竜丸の問題はただ単に水爆実験によって犠牲になったという認識でせいぜい「このようなことを繰り返してほしくない」で終わってしまう。「水爆実験が起きた島の近くの人はどうなのだろう。」「第五福竜丸以外の船は大丈夫だったのか。」「そのような視点を生徒の中に育てていく過程の中でこそ、

この第五福竜丸の問題をより明確にできるのではないかと考えている。さて、そのような平和認識を育てるにあたって、第五福竜丸展示館は盲学校に在籍する生徒にとって、きわめて重要な意味を持っている。視覚に障害を持っているものにとつて、具体的なイメージを持つて一つひとつのことを学んでいくことは目が見えるものと比べると実感的ではない部分がある。しかし、それはある部分の話であつてまったく理解できないものではない。展示館に生徒とともに学ぶときは、まず第五福竜丸の模型をさわって、全体としてのようにな船なのかということから始まる。そして次に全体像をそれなりにイメージした所で、本物の船にさわりながらこの船が物語る問題を説明していく。人々はこのような気持ちで船に乗り、被ばく後どのようなことを考えていたのかを想像してみる。この中で船に人間が乗っていたことをたしかに問題として生徒たちはつかんでいったような気がする。授業で生徒たちは、第五福竜丸の事件があつたとき、社会は船に乗っていたマグロにつ

いては異常なまでの関心を示したものの船の乗組員のことには丁寧な調査がされなかつた事実注目し、疑問を持つていくが、そのことは船を見る(さわる)ことによりたしかに認識として育っていくように思う。

実物を使う教育は盲学校の教育の中では重要な位置を占め、その教育的な意味は見えないからというだけでは本質的なものを持っている。その本質的なものを展示館は迫力を持って生徒たちに教えてくれている。今年高等部の一年生を担任しているが、展示館を再びこの担任している生徒と訪ねて第五福竜丸が私たちに問いかけているものを見つめながら、見えないものを見えるように(本質的な理解)するきっかけを生徒と一緒に作り出したいと考えている。

(筑波大学附属盲学校教諭)

